

あいらの歴史と物語

発行責任者：始良歴史ボランティア協会
会長 橋木 雅晴
編集者：広報部長 竹之下 洲 一

連絡先：〒899-5421 鹿児島県始良市東餅田 498

始良市歴史民俗資料館 TEL 0995(65)1553

ガイド練習報告 蒲生史跡めぐり①



蒲生八幡神社

昔の蒲生の川利用

恒見 勝則

始良市歴史民俗資料館 2 階の納屋町船の説明文に「納屋町には藩の納屋町御蔵があり、藺牟田・宮之城・蒲生・山田方面の年貢米を集め納めていた」とあります。

昔の蒲生川は、川幅は狭かったが、水量は多く流が続き、潮の干満によって野町の下や塩入戸あたりまで水位が上がっていたといえます。それで、後郷川の上流の辻どん流、幽栖寺下、前郷川の八幡下、川崎渡などには 5~6 艘の川舟や船頭も待機していました。下り荷として多量の米・木炭・人などを、上り荷として黒砂糖・紙すき用の糊木・雑穀類などを運びました。

島津軍が蒲生を攻めたとき、北村城や松坂城からは樽に米などを入れ川に流し、蛙ヶ城のあたりで引き揚げ、蒲生本城の危機を救っていましたが、それも島津軍に見つけれ、蒲生城落城の一因になったといわれています。

大正期に入り道路が整備され、舟による運送は途絶え、また川は河川工事などによって大きく変わってしまいました。

蒲生野町

坂元 清美

野町は薩摩独特の行政上の呼び名です。明治維新前の蒲生野町は、天神馬場より下十字に至る間に限定されていました。嘉永 6 年(1853)ごろには 40 軒の町屋が密集し、約 300 人が住み、薩摩藩では 8 番目の大きな野町でした。

野町に課せられた公役(宿泊中の雑役)・送人馬(通送・運輸の仕事)で、ほとんどの町屋(家)で馬を飼っていました。質屋小路と天神馬場が交わる野町の入口には、注連縄を張った町門があり「垂れン口」とよばれました。

明治維新前後、この野町で最も栄えていた「流上家」の 4 代目は流上常右衛門で、呉服屋・質屋・薬屋の経営に手腕を発揮し、特に売薬業では全県下に名をはせました。大阪や琉球との交易も行い、鹿児島県の代表的な商人でしたが、明治 29 年(1896)親戚の事業失敗の巻き添えで没落してしまいました。

現在も同じような間口ですが、当時の様子をうかがい知ることはできません。ただ野町を離れ上馬場に行くと、薬屋(藤崎家)・煙草屋・食堂などに当時の面影を見ることができます。

「歩き・み・ふれる歴史の道」西日本ブロック鹿児島大会 (ガイド担当者報告)

11月6日(日)「歩き・み・ふれる歴史の道」西日本ブロック鹿児島大会が、始良市内の次の4コースで実施されました。

- 加治木Aコース (10 km) : 曾木家の門→加治木島津屋形跡→春日神社→龍門滝→龍門司坂→
(40人参加) 高倉展望所→金山橋→加治木城跡→南浦文之墓→山元窯跡→御里窯跡
- 加治木Bコース (8 km) : 蒲生田通り→加治木銭鑄銭所跡→性心寺→能仁寺島津家墓地→精矛神社→
(15人参加) 日木山宝塔→肝付家の墓→加治木島津屋形跡→加治木郷土館
- 重富コース (8 km) : 白銀坂駐車場→栢山集落→重富麓→平松城跡→重富島津家墓地→重富招魂石→
(43人参加) 狭霧神社→白銀森林公園→愛宕神社→白銀坂第二展望所→J.Tの森
- 蒲生コース (8 km) : 蒲生御仮屋門→蒲生城跡→竜ヶ城磨崖一千梵字仏蹟→蒲生城柵形跡→霧島神社→
(25人参加) 恵比寿神社→蒲生どん墓→永興寺→記念碑群→蒲生八幡神社→蒲生のクス
- *それぞれのコースの代表者にガイド内容を報告してもらいました。

加治木 A コース

黒衣の宰相 南浦文之の墓

本多 幸子

昨日までの雨で湿った龍門司坂、踏破できるかと心配でしたが、強行突破！参加者の声に励まされ登頂開始。昼食後は、加治木城跡より急な下り坂の途中にある水源地で城の説明を聞く。加治木の町・山・海と絶景を眺めながら、



龍門司坂

400年間にわたるこの城での多くの人々の暮しや、廃城とともに城を去ることにな

った人々の歴史を思い、感慨ひとしおでした。いよいよ文之和尚の墓です。昭和11年(1936)に国の文化財の指定を受けています。和尚は日向国南郷外浦（このうら）の生まれで南浦（なんぼ）と号しました。義久・義弘・家久に仕え、興国寺(霧島市)・安国寺(始良市)・大竜寺(鹿児島市)の住職となり、元和6年(1620)、大竜寺より興国寺へ行く途中、安国寺で亡くなりました。

文之和尚は薩摩ばかりでなく日本の学問・道徳に大きな功績を残しました。薩南学派の創始者桂庵玄樹の訓点（このうら）が記された「四書集注」を改訂して文之点を考案しました。また、『南浦文集』所収の「鉄炮記」では、西欧人の初来航を伝える貴重な記録も残しています。

加治木 B コース

加治木鑄銭所跡

恒吉 一洋

加治木新町に鑄銭所跡があります。ここは天正年間(戦国時代末)から、寛永年間まで加治木銭を鑄造していたところで、この一帯を銭屋町と呼んでいました。

江戸時代初めまで、日本では中国銭を使っていました。当然絶対量が不足したので、全国各地で中国銭をまねた銭を造るようになりました。それを私鑄銭といい、全国で鑄銭所跡がわかっているのは加治木だけです。

加治木銭は、中国銭の「洪武通宝」などを模倣して造り、裏に加・治・木のうちの一字を入れました。(ほとんどが治)

島津義弘の指示もあり、慶長12年(1607)頃には最盛期を迎えましたが、寛永13年(1636)の「寛永通宝」の鑄造開始により、私鑄銭造りは禁止され、加治木銭の鑄造も終了しました。



加治木鑄銭所跡



加治木コース集合写真

重富コース

政治・教育の中核だった平松城跡

西田 實

平松城跡は、天文 23 年(1554)岩剣城の合戦で勝利し、初陣で功を立てた島津義弘が城番を命ぜられ、



平松城跡

その麓に城を築き居住したところです。城跡の石垣は、野面積みとい

って自然石を積み重ねたもので、今はこの石垣と古井戸のみが当時の面影を残しています。

城跡の前には品格のある武家門があります。ここに居住した武士は、越前(重富)島津家の家老です。屋敷も広く、周囲の生垣と石垣も立派です。元文 2 年(1737)、時の藩主島津継豊が越前島津家の再興をはかって、弟忠紀みよとせきに名跡を継がせました。平松城は、越前(重富)島津家の館となり、仮屋が置かれ麓の街が形成されました。重富という地名は、越前島津家初代忠綱が居住していた越前の国の地名に由来しています。重富島津家の屋敷は、廃藩置県まで使用されました。文久三年(1863)には、学校の前身である「振業館しんぎょうかん」が屋敷内に設立され、士民は学芸・武芸に励み、知徳の高揚に努めていました。現在は、重富小学校となっています。校門は、かつて旧鹿児島県庁の正門を移設したもので、国の登録文化財となっています。

蒲生コース

霧島神社(祭神ニギノミコト)

吉田 茂子

上久徳に鎮座する「霧島神社」に昭和 54 年(1979)改築の記念碑が建っています。

創始・沿革については不詳ですが、祭神は「ニギノミコト」です。蒲生氏がこの地に居住した頃より、「霧島神宮」に参詣していましたが、あまりにも遠方であるため、「霧島神宮」の御分霊かんじょうを勧請し、蒲生の地に祭り「霧島神社」としたといひます。江戸時代には蒲生の一般の人々の霧島信仰も盛んで、信者達は「霧島講」をつくって、毎年秋に代表者が霧島神宮に参拝し、講員のお札を頂いて帰っていました。そして、帰りを待つ信者達は、代参者を山境まで出迎え、酒宴など催しねぎらいあったそうです。

さらに、境内には「豊受乃大神」の碑も建立されています。これは穀物神として、農業をはじめ諸産業をつかさどることで崇敬され、嘉永 4 年(1851)に祭られています。



霧島神社

秋の特別展開催に寄せて

始良市歴史民俗資料館館長 尾口 義男
今秋の特別展「蒲生八幡神社の歴史」の事前調査で、蒲生御仮屋文書（県指定文化財）の中に弘化3年(1847)、「正八幡若宮拝領物並びに古物調帳」という蒲生郷から藩への報告書があることを知りました。これによれば、保元3年(1158)の平重盛^{くたしづみ}下文をはじめ後白河法皇の御教書、源頼朝袖判のある文書、室町幕府將軍足利義教御書、同管領細川持之書付などが、蒲生八幡神社に江戸時代の終わり頃まで所蔵されていたことがわかります。平安末から鎌倉・室町前期に至る時代の蒲生氏と中央権力者との直接的な関わりを示す古文書群で、古代末から中世前期の蒲生氏の地位や動向、及びその庇護^{ひびご}をバックにした蒲生八幡神社の社格の高さなどをうかがうことができます。



今回の特別展では確認できませんでしたが、これらの古文書が今も残っておれば、本市のたいそう貴重な宝物になります。今後、発見の可能性もある古文書です。どのようなことが書かれていたのでしょうか。蒲生氏と中央の権力者はどんな関係で結ばれていたのでしょうか。本物を見てみたいものです。

平成23年度ボランティアガイド実施報告(4)

- ① 8月24日 博物館実習大学生
加治木史跡ガイド (館長・竹之下)
- ② 9月1日 博物館実習大学生
蒲生史跡ガイド (館長・橘木)
- ③ 10月5日 垂水史談会
重富史跡ガイド (西田・竹之内)
- ④ 10月8日 ムーミン講座
蒲生・重富史跡ガイド (恒吉・坂元)
- ⑤ 10月18日 加治木あやめ学級
蒲生・住吉史跡ガイド (橘木)
- ⑥ 10月21日 加治木ゆずり葉学級
蒲生八幡神社ガイド (橘木)
- ⑦ 11月3日 重富小学校
岩剣城登山支援 (濱口)

始郷(あいきょう)

建昌城跡地で見えたものは

西田 實

ムーミン講座の下調べに、建昌城跡を訪れた。二ノ丸跡で見えたものは、イノシシが餌をあさった跡だった。広々とした常見之丸跡では、トノサマバッタが足元から飛び立つ。周囲の森ではムクドリ^{くわわ}の鳴き声^{なまこ}がする。東之丸跡の曲輪を廻る時、「ああ、これ？」と同僚の竹之内氏が驚きの声を発した。何と超ジャンボ茸^{きのこ}ではないか。薄暗い森の中に白色のマントカラカサタケが地上に浮かぶ。

建昌城跡は、動植物の宝庫でもある。四季折々に訪ねてみると、新しい発見がある。

歴史用語解説 (竹之下 洲 一)

『納屋町御蔵』 江戸時代、鍋倉村の納屋町にあった藩の御用蔵である。東餅田村の「小烏御蔵」とともに、地元帖佐郷をはじめ、藪牟田・佐志・黒木・宮之城・山崎・蒲生・山田など各地からの年貢米が収納され、納屋町船で鹿児島に運ばれた。

『安国寺』 室町時代、足利尊氏・直義兄弟が、無窓疎石の勧めで後醍醐天皇をはじめ、元弘の変以来の戦死者の霊を慰め、国土安穩を祈る目的で国ごとに建立した寺。大隅国は加治木に設けられた。仏舎利を納めた利生塔も建立されたが現存しない。

『振業館』 文久3年(1863)重富島津第6代忠鑑^{うずしこ}(珍彦)は、藩士の子弟の教育に意を用い、鹿児島の本岩下御部屋を重富仮屋敷地内に移し、振業館と名付けて、重富武家子弟の学問所とした。教科内容は漢学・国学・私学が中心で、使用された教科書は始良市歴史民俗資料館に保管されている。

編集後記 今回の内容は「歩き・み・ふれる歴史の道 西日本ブロック鹿児島大会」でのガイド内容が中心です。当日は多くの皆様の参加をいただき、すばらしい笑顔のなかで、無事にそれぞれのコースを巡ることができました。

今後ともよき案内ができるように、研修を積み重ねていきたいと考えています。

皆様方のご支援をよろしくお願いいたします。